

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）

（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究

課題番号：H30-エイズ-一般-003

【分担研究2】愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

研究分担者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 教授）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、本研究によって HIV 診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。令和元年度は研究成果として、愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査（アンケート）を行った。県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に募集のもと参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を継続して開催した。令和2年度としての同様の試みは、新型コロナウイルス感染のこともあり（講演できない面を補足する）講演すべき内容を判りやすく冊子として作製し各高齢者施設に配布した。特に高齢の HIV 感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機能障害（HAND）についても啓蒙した。地方での HIV 診療のモデルとして体制整備・充実に努めつつあるが、都会からの帰郷なども要因である高齢の HIV 感染者が年々増加傾向にあるため、介護施設での啓蒙は継続して必要と考える。

研究分担者

末盛浩一郎・愛媛大学医学系研究科・特任講師

井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長

若松綾・愛媛大学医学部附属病院・看護師

A. 研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計 200 名以上の患者を治療している。四国地区は近年 HIV・エイズ患者の増加が著しく、当県もエイズ拠点病院に指定されている病院が 17 施設もあるもの

の殆どが診療未経験であり、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が 29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者の HIV・エイズ患者が多く、HIV 感染および合併症が進行し日常生活に差し障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているが HIV に対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られるこ

とも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえて、当院では数年前より HIV 診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべき HIV 感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。このような背景のもと、中核拠点病院の立場から、県内の病院・施設との連携整備、さらには県・市の保健行政との連携も踏まえ、HIV 感染者・エイズ患者に対する診療体制を整備し充実を図りたいと考えている。ブロック拠点病院の存在しない四国地区全体の HIV/エイズ診療体制の充実に努めることを実行していきたい。

さらにこれらの研究成果は、エイズ学会をはじめ多くの機会に公表・報告していくことで、他府県などにモデル地区としての立場で発信し、四国のみならず全国の地域の HIV 診療の充実に努めたい。

B. 研究方法

愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に募集のもと参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を開催する。特に高齢の HIV 感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機能障害

(HAND) についても啓蒙する。知識啓蒙とともに参加者各自に対して HIV 感染者を支援することの自覚を促すことを目的に、研修会の終了時に HIV 感染者の福祉・介護に

ついて、受け入れ時の支障などに関してアンケートを行う（参加 50～100 名程度）。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C. 研究結果

県内の高齢者施設から現場の介護・福祉担当者に参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を令和 2 年 1 月 29 日に開催した。研修会時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行い（参加者 53 名）、回答者 40 名の 85%が施設として受け入れ可能との多くの前向きな意見を得た。令和 2 年度としての同様の試みは、新型コロナウイルス感染のこともあり（講演できない面を補足する）講演すべき内容を判りやすく冊子として作製し各高齢者施設に配布した（図に資料の 1 部を提示）。

図 冊子内容（一部抜粋）介護に必要な HIV の実践的な知識を自学用に多く含む。

D. 考察

全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後の HIV 感染者の高齢化と介護・福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では令和 2 年末現在累計 200 名以上の HIV 診療経験があり（県内の大半の HIV 診療を担当）、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV 感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年 10 名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢の HIV 感染者が多く見られ HIV 診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢の HIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において令和 2 年末現在 50 歳以上の 8 割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、各拠点病院と長期療養患者を受け入れ得る介護・福祉施設間の連携は緊喫の課題である。県内の高齢者施設から現場の介護・福祉担当者に参加してもらい、HIV 感染症等に関する研修会を令和 2 年 1 月 29 日に開催した。研修会時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行い（参加者 53 名）、回答者 40 名の 85% が施設として受け入れ可能との多くの前向きな意見を得た。令和 2 年度としての同様の試みは、新型コロナウイルス感染のこともあり（講演できない面を補足する）講演すべき内容を判りやすく冊子として作製し

各高齢者施設に配布した

令和 2 年 1 月は、愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会を県自治体の協力のもと、全県下に呼びかけて開催し HIV 感染者に対する支援者としての自覚を促すことができたことは意義深い。さらに研修会後の実態調査においては、参加者の 87% は「治療等が良好なら不安はない」（うち 22% は治療に関係なく不安はない）および 85% で「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高いと考えられた。令和 3 年は、新型コロナウイルス感染症の影響にて令和 2 年のような対話形式の研修会が困難なため補完の意味で、解説を多く挿入した冊子を各施設に参考にしていただく主旨で送付した。

なお、これらの実践的な啓蒙は、エイズ学会での発表および雑誌に投稿し査読の結果、2018 年 2 巻に掲載されたが、さらに第 2 報も令和 3 年 1 巻に掲載された。学会報告とともに、文体としてしかも継続的に研究期間中に、福祉連携のモデルとしての成果を全国に発信できたことも極めて意義深い。

いずれにしても HIV 患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加を抑制するための HIV 感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して地方の各高齢者福祉施設において HIV 診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。

さらになお、その介護福祉連携のモデル

地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

E. 結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV 診療体制整備のために高齢介護施設の介護・福祉担当者への講演・資料配布、さらに積極的に出張講義、ポケット版小冊子の配布などを行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要な HIV 感染・エイズの増加に対応するために、HIV 診療体制の整備は、特に地方においては拠点病院間のみならず介護・福祉施設との福祉連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 末盛浩一郎、田中景子、石川明子、小野恵子、芝田佳香、武田玲子、若松綾、宮崎雅美、中尾綾、乗松真大、木村博史、山岡多恵、井門敬子、竹中克斗、高田清式。愛媛県の各医療機関における HIV/AIDS 研修会後のアンケート調査を介した比較検討。日本エイズ学会誌, 23(1):26-32, 2021,
2. Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K. The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects. J Infect Chemother. 26(3):240-244,2020
3. 高田清式。新型コロナウイルス感染症の今わかっていること。EOCA (愛媛臨床整

形外科医会会報) :35 (1) 5-10, 2020.

4. Matsushita M, Arise K, Morimoto N, Takeuchi S. End-of-season outbreaks of nosocomial influenza caused by waning vaccine immunity. Journal of Infection Prevention 21: 119-121, 2020

5. Kitamura S, Matsushita M, Komatsu N, Yagi Y, Takeuchi S, Seo H. Impact of repeated yearly vaccination on immune responses to influenza vaccine in an elderly population. American Journal of Infection Control 48: 1422-1425, 2020

6. Matsushita M, Matsumoto K, Kitamura S, Komatsu N, Seo H, Takeuchi S. Validation of the “My Headache Checker” that includes osmophobia in the diagnosis of migraine. Journal of general and family medicine 22: 24-27, 2020

7. 福井亜里沙、早淵 修、本田真仁、吉田圭佑、片岡秀之、山口普史、高田清式、市原新一郎。早期治療介入により重症化を免れた熱帯熱マラリアの 1 例。四国医学雑誌. 76 (3, 4) :197-202, 2020.

8. 中村美保、前田英武、岡崎雅史、西田拓洋、朝霧正、四國友理、北村優衣、高田清式、武内世生。医療機関における HIV 陽性者受け入れ時の問題点と解決への取り組み。日本エイズ学会誌 (投稿中)

2. 学会発表

1. 高田清式。HIV 感染症の最近の話題。日本内科学会第 64 回北海道支部生涯教育講演会、2020 年、北海道、WEB 開催
2. 菊地正、蜂谷敦子、西澤雅子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、

伊藤俊広、林田庸総、湯永博之、岡慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂寛、渡邊珠代、今橋真弓、松田昌和、重見麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における 薬剤耐性 HIV-201 の動向。日本エイズ学会、2020 年、WEB 開催

3. 谷口裕美、岡本愛、村上晶子、森本麻里、川野由季、西村真智子、末盛浩一郎、宮本仁志、高田清式、当院における HIV スクリーニング検査偽陽性例の検討。日本エイズ学会、2020 年、WEB 開催

4. 中尾綾、武田玲子、藤原光子、本園薫、末盛浩一郎、山之内純、竹中克斗、高田清式、HIV 感染者への POMS2 を使用した精神的支援の検討。日本エイズ学会、2020 年、WEB 開催

5. 臼井麻子、中尾綾、西田拓洋、吉川由香、海面敬、吉武亜紀、赤松祐美、池谷千恵、中村美保、川田通子、佐藤譲、武内世生、窪田良次、尾崎修治、和田秀穂、千酌浩樹、山下光、山之内純、高田清式、中国四国地方における HIV 関連神経認知障害に関する研究 ―中間報告―。日本エイズ学会、2020 年、WEB 開催

6. 乗松真大、井門敬子、松本卓也、本園薫、末盛浩一郎、飛鷹範明、田中守、高田清式、抗 HIV 薬ラルテグラビルが原因で Grade 3 の血圧上昇をきたした 1 症例。日本エイズ学会、2020 年、WEB 開催

7. 高田清式、末盛浩一郎、村上雄一、高

齢者のアフリカ旅行後の重症マラリアの治療例、グローバルヘルス合同大会 2020、2020 年、WEB 開催

H. 知的財産権の登録状況（予定を含む）

該当なし